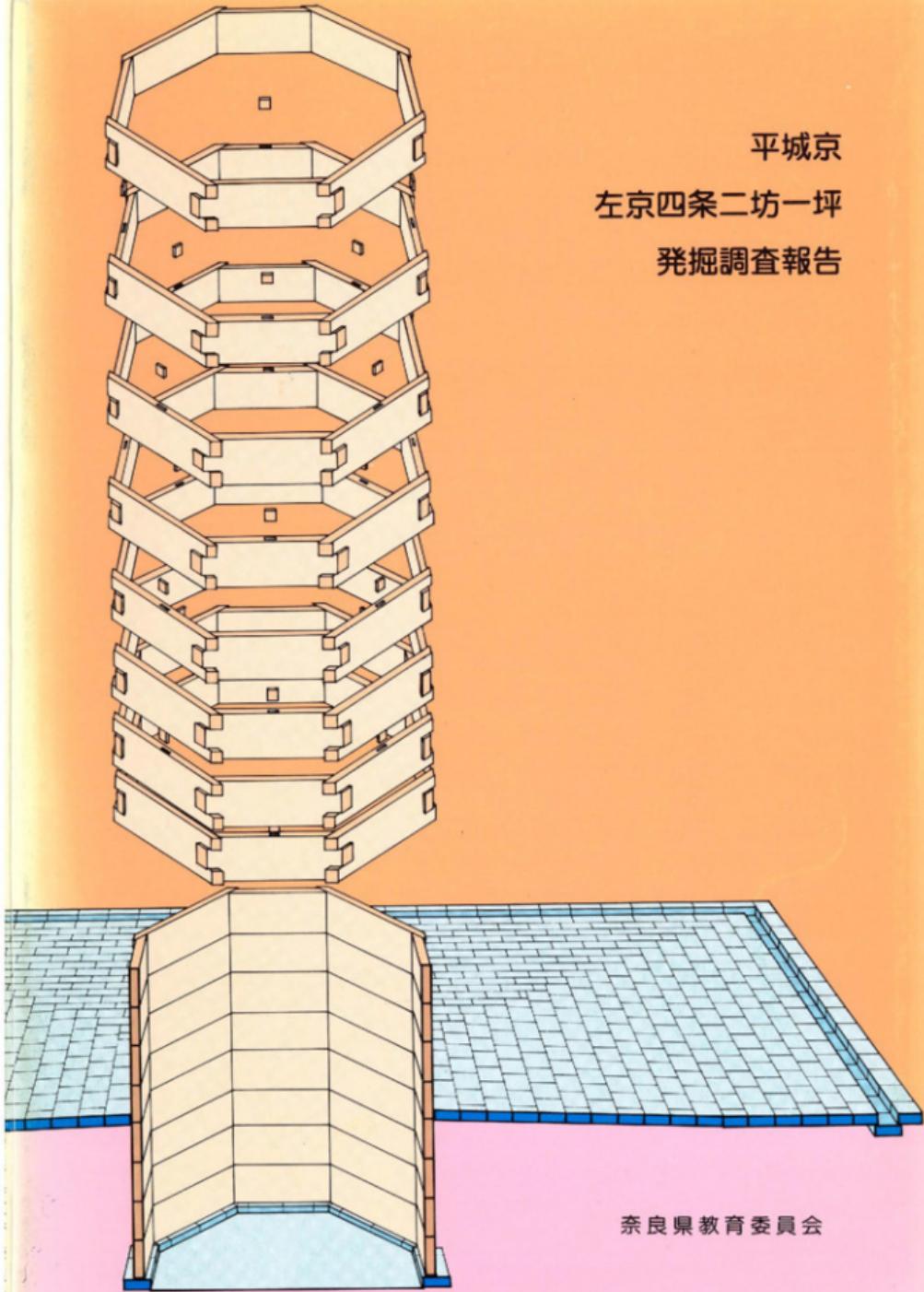


平城京  
左京四条二坊一坪  
発掘調査報告



奈良県教育委員会



1 発掘区全景（東から）



2 八角形井戸

## 序

奈良盆地の北端に位置する平城京は南北約5km、東西約6kmにも及ぶ広大なもので、わが古代律令国家のシンボルともいべき巨大な都市であります。その中心である平城宮については国有地化が図られ、年々発掘調査によってその内容が次第に判明されつつあります。京城に関しても、開発が進むにつれ保存・記録措置を講ずるための事前発掘調査を行う機会が増加し、ほぼ全域に貴重な平城京の遺構の存在することが明らかとなっていました。

今回、植田商事株式会社が社屋及び倉庫の新築を計画した地は平城京左京四条二坊一坪にあたり、重要な遺構の存在が予想されたため、建設工事に先立って奈良国立文化財研究所に依頼して発掘調査を実施するはこびとなりました。その結果、本書に示されておりますような貴重な資料を得ることができました。

本書が今後の平城京城の保護・研究、ひいては古代史研究の一助ともなりえれば望外の喜びと存じます。

最後になりましたが、本調査を担当いただきました奈良国立文化財研究所の関係各位の労苦に対して厚く感謝申し上げます。

昭和59年3月31日

奈良県教育委員会

教育長 大島 寛

## 目 次

I 序 章	1
調査の経過と概要	1
II 遺 跡	3
1. 遺跡の概観	3
2. 遺構	3
3. 占地と建物配置	10
III 遺 物	12
1. 土 器	12
2. 瓦 壇	19
3. 木製品・金属製品	24
IV む す び	26

## 卷頭写真

1 発掘区全景(東から)

2 八角形井戸

## 写真図版

- |            |             |                     |
|------------|-------------|---------------------|
| 1 造構       | 発掘区全景(南から)  | 10 井戸SE2600 井戸枠細部   |
| 2 造構       | 発掘区全景(北から)  | 11 井戸SE2600 井戸枠組手   |
| 3 造構       | SB2580(南から) | 12 井戸SE2600 太納      |
| 4 造構       | SB2585(南から) | 13 井戸SE2600 井戸枠と埠   |
| 5 造構       | SA2590(東から) | 14 井戸SE2600 井戸枠と埠全景 |
| 6 造構       | SB2605(北から) | 15 井戸SE2600 井戸枠と埠   |
| 7 井戸SE2600 | 井戸周辺(北から)   | 16 造物上器             |
| 8 井戸SE2600 | 井戸と描形(西から)  | 17 造物軒瓦             |
| 9 井戸SE2600 | 井戸枠         |                     |

## 挿 図

写真1 発掘調査風景	1	図 14 坪中心部の推定建物配置	11
図 2 調査地と周辺調査地の位置図	2	図 15 SE2600出土土器	13
図 3 造構配置図	4	図 16 SK2591出土土器	15
図 4 造構変遷図	5	図 17 SK2613・SB2585・SA2608出土土器	15
図 5 井戸SE2600断面図	6	図 18 SK2596出土土器	16
写真6 SE2600の上層の状況	7	図 19 金粉付着須恵器	16
写真7 井戸掘り下げ作業	7	図 20 燐地層出土土器	17
写真8 井戸枠取り上げ作業	7	図 21 軒丸瓦・軒半瓦	20
写真9 井戸枠下の埠	7	図 22 軒丸瓦実測図	21
図 10 井戸枠実測図	7	写真23 細棒出土の状況	24
図 11 井戸枠組み上げ模式図	7	図 24 佐波埋蔵実測図	24
写真12 井戸枠墨書き	8	図 25 木製品実測図	25
図 13 坪と建物配置	10		

## 表

1 周辺調査の概要	2	2 坪四隅の座標値	10
-----------	---	-----------	----

## 例　　言

1. この報告書は、植田商事株式会社（大阪市福島区福島五丁目7-10 代表取締役 植田昭治氏）が建設する社屋建設予定地における発掘調査に関するものである。
2. 調査は、奈良県教育委員会の依頼で、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、工楽善通、上野邦一、千田剛道、巽 淳一郎、本中 真、深沢芳樹らが参加した。また、調査にあたっては、植田商事株式会社の協力を得た。
3. 本書の作成は、岡田英男部長の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議をもとに次のように分担執筆した。I、II、IV 上野邦一；III-1 千田剛道；III-2 深沢芳樹；III-3 金子裕之。なお、土器に付着した金粉の螢光X線分析は当研究所埋蔵文化財センター・遺物処理研究室沢田正昭、秋山隆保が担当した。
4. 本書の編集には上野邦一があたった。また造構・遺物・図版の写真は八幡扶桑、側 幹雄が担当し、藤田千賀枝の協力を得た。

# I 序 章

## 調査の経過と概要

この報告書は、平城京左京四条二坊一坪における社屋建設予定地(奈良市四条大路一丁目甲808-1ほか)で、奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査に関するものである。調査は、奈良県教育委員会の指導によって原因者負担で実施されるはごびになり、開発行為者である植田商事株式会社の協力を得て、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が発掘調査を担当した。

近年、近鉄新大宮駅付近や国道24号線の高架周辺は、市街化が進行している。こうした市街化によって、平城京の貴重な遺構が失われていく状況にある。奈良県教育委員会では、開発担当部局と密に連絡をとり、市街地開発によって遺構の破壊が予想される場合は少なくとも事前発掘調査を行うことを原則としてその指導に当っている。当調査地区周辺は、今後も一層の都市開発が予想される地域である。これまでにも、この地域においては開発に先立つ発掘調査が行われてきており、その結果平城京研究に多大な成果を挙げている(図1・表1参照)。

今回の調査区は、社屋建設予定地のうち約 $\frac{1}{2}$ にあたる、約650m<sup>2</sup>を発掘調査した。調査期間は、昭和58年3月30日から5月23日までの約8週間である。

発掘にあたっては、便宜上京内地区割にしたがい、6AFM-Q地区と定め、更に国土方眼座標(第六座標系)の基準点(X=-146,660.0, Y=-17,999.0)をQK 88として、3m間隔の小地区割を設定した。

奈良時代の遺構面は、地表下20~30cmにあり、全般的に後世の削平をうけていたものの、遺構の保存状態は良好であった。検出遺構は、後述のように奈良時代の掘立柱建物をはじめ、井戸、塀、土塼など多岐に及んでいる。調査面積は比較的小規模であるが、整地土及び土壤からの土器や瓦出土量が多い。

調査結果の詳細は次章以降にゆずるが、調査成果として一坪を占める邸宅であったこと、平城京での軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせの一つが明らかになったこと、奈良時代の八角形井戸を検出したことなどがある。また八角形井戸枠は取り上げたうえ樹脂による保存処置を施している。

## 調査日誌抄



写真1 発掘調査風景

3.30	関係者による発掘調査の協議
3.30~4.2	バックホーによる表土排除
4.4~26	発掘調査準備後、遺構検出
4.26	写真撮影
4.26~5.2	遺り方実測
5.4~18	発掘区南半の検査、遺構検出
5.18	写真撮影
5.19~21	検査部分の実測
5.23	遺構養生(紗入れ)、発掘器材撤収

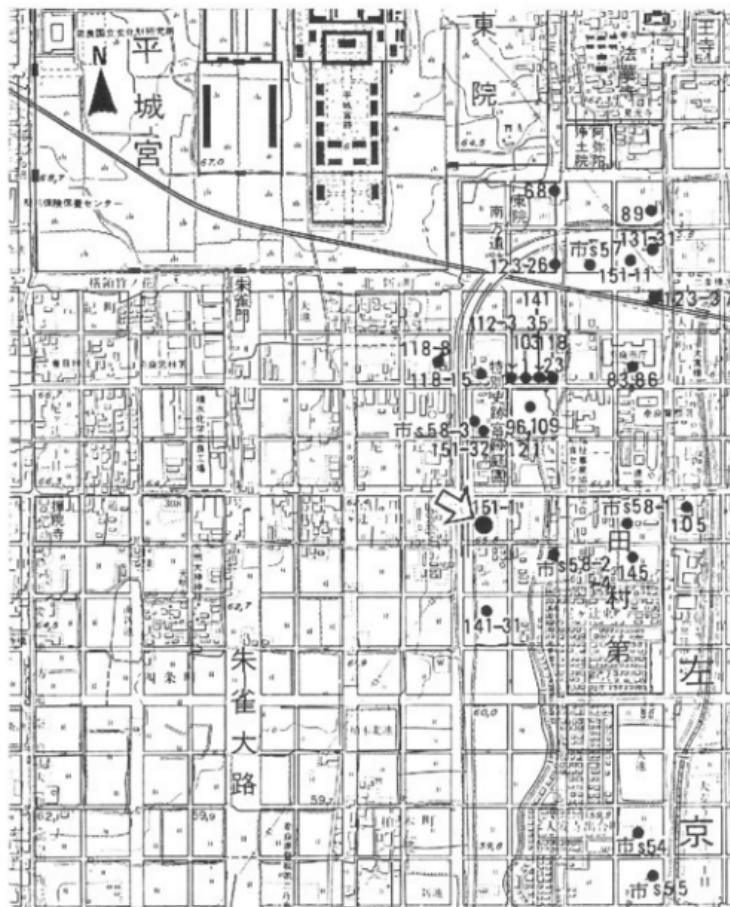


図2 調査地と周辺調査地の位置図(市は奈良市による調査)

表1 周辺調査地の概要

発掘調査次数	左京 条・坊・坪	發掘面積(m <sup>2</sup> )	主な造構
83-86	3-2-10-15	3500-3000	掘立柱建物25棟、坪を分割する所
96-109・121	3-2-6	4200-1100-400	庭園、掘立柱建物5棟
105	4-3-1	554	強立柱建物5棟
市54	5-2-14	4209	強立柱建物27棟、コの字型配置の建物群
141-31	4-2-3	250	強立柱建物9棟
145	4-2-15	600	礎石建物2棟、掘立柱建物2棟
市58-1	4-2-16	171	掘立柱建物2棟
市58-2・4	4-2-7	204-253	掘立柱建物7棟、訪問路側溝
市58-3	3-2-3	120	掘立柱建物3棟
151-32	3-2-3	940	掘立柱建物6棟

## II 遺 跡

### 1. 遺跡の概観

今回の調査地は、平城京廃絶以降田地となったと考えられる地区で、地形はほぼ平坦である。遺構は、主に地表下約20~30cmのところに堆積する地表面(QO85付近は暗灰褐色粘土、他は黄灰粘土)と奈良時代中期以前と考えられる整地上(暗黃褐色粘土)で検出した。検出した遺構の大半は奈良時代と思われ、柱掘形の深さや溝等の遺存状況からみて、全体的に後世の削平をうけたと判断される。

しかし、遺構の保存状態は良好で、多数の柱掘形、土壙、井戸等が検出され、これらを検討した結果、平城京左京四条二坊一坪は奈良時代初頭から奈良時代後半にかけて宅地として利用されたことが明らかとなった。

この坪には、奈良時代の前期・中期・後期の少なくとも3期に宅地削や住い方が変わっている。

奈良時代前半期は、この坪は坪SA2590などから考えても南北に四分されていて、各敷地には、小さい柱掘形をもつ建物があった。奈良時代中頃には、この坪は一坪を占める宅地となり、相当身分の高い人物の邸宅と考えられる。奈良時代後半には、一坪の宅地は階層されたものの大きい建物ではなく、八角形井戸が築かれる。

出土遺物は、土器・瓦・埴の出土が多く、軒瓦では平城京内の邸宅で使用された軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせの一つを確定できた。埴の出土は、京内では類例が少なく、八角井戸SE2600や土壙SK2591、SK2597に集中して出土し、他にも柱掘形から出土したが、いずれも遺構に直接関係するとは思われない。

### 2. 遺 構

発掘区の遺構は大別して、古墳時代・奈良時代・奈良時代以降に分かれる。古墳時代の遺構には溝・土壤がある。奈良時代の遺構には、掘立柱建物5棟や掘立柱の東西塀2条・南北塀が4条あり、2~3個の掘立柱穴が並ぶ場も多い。この他に八角井戸、土壙がある。奈良時代以後の遺構には、中世以降の土取穴と思われる円形の穴や、近世から近代にかけての井戸や性格不明の土壤がある。

#### 奈良時代の遺構

発掘区で検出した遺構は、ほとんどが奈良時代の遺構である。奈良時代の遺構は重複関係から、すくなくとも三時期に分けて考えることができるが、時期不明の遺構もある。三時期を、A期・B期・C期として各時期の遺構を述べる。

A期の遺構 坪の南北を四分する塀、小さい掘立柱建物2棟がある。

SA2590 発掘区中央部の東西塀で、9間分を検出した。東西にさらに伸びるとと思われる。柱掘形は一辺1mほどと大きく、検出した柱穴10ヶ所のうち4ヶ所には柱根がのこっていた。柱は径

図3 造構配置図

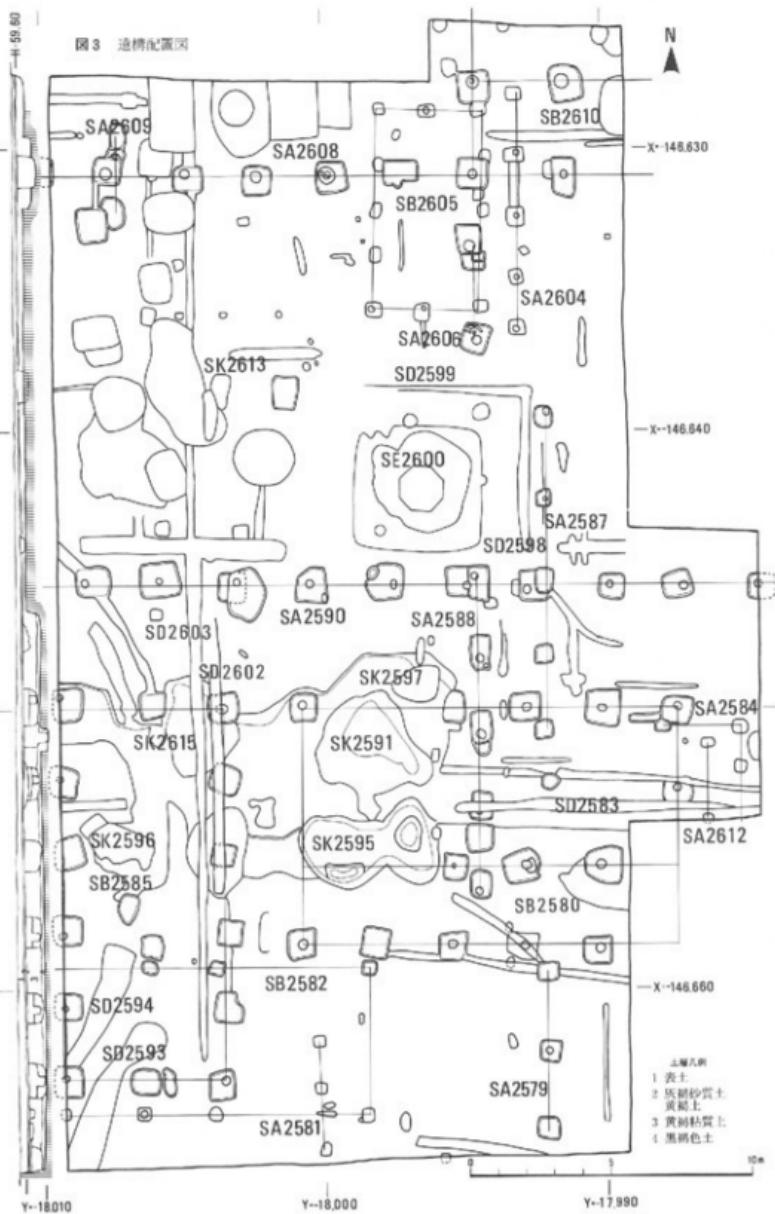
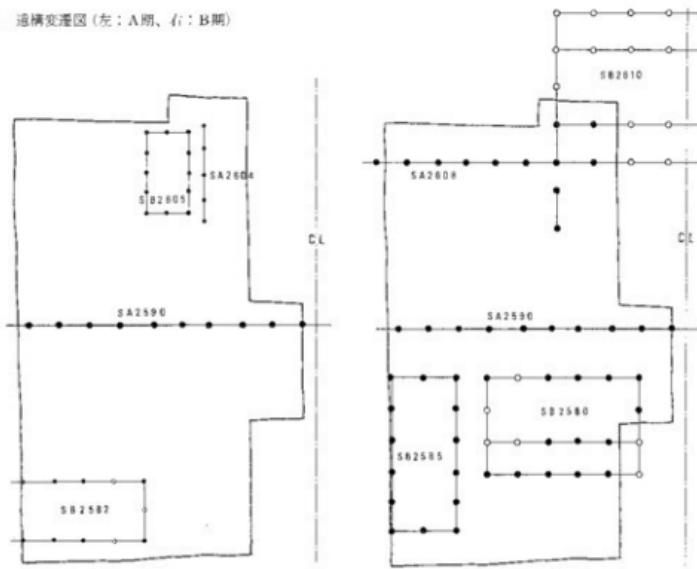


図4 造構変遷図(左:A期、右:B期)



24~30cmである。柱間寸法にはばらつきがあるが、平均すると、2.65m（9尺：天平尺 以下同じ）である。この辯は坪を南北に4等分する南から1番目の位置にあり、地割の塀と考えられよう。時期を決める手掛りは乏しいが、B期の建物群との共存や、また八角形井戸 SE2600との共存は考えにくく、A期とした。

SB2605 発掘区北方の小規模建物で、桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。柱掘形は一辺40cmほどの方形で小さく、柱痕跡は直径21cmである。東西塀SA2608の柱掘形との前後関係から、SB2605が古い。建物は、北で東にすこし振れる。

SB2582 SB2585の南端部で、SB2585に重複する東西棟の掘立柱建物を検出した。西妻を検出していないので、この建物は西の未発掘区に伸びていると考えられ、桁行4間以上・梁行2間の建物である。柱穴は削平されているが、7ヶ所を検出し、一辺40cmほどの隅丸方形である。柱痕跡が1ヶ所のこり、その直径は21cmである。柱穴の重複関係ではなく、時期を決めてがかりは乏しいが、SB2605と共に柱穴や柱径が小さく、A期とした。

SA2609 発掘区の北西にある掘立柱穴2つで、南北に並ぶ。造構の時期や性格は不明である。南北柱穴がB期の塀SA2608に壊されているので、A期とした。

SK2613 井戸SE2600の西方にある土壙で、埋土から出土した遺物からA期と推定される。

B期の造構　柱掘形が1mほどの掘立柱建物3棟・東西塀1条があり、この時期の建物や塀

は計画的に、整然と配置したと考えることができる。

SB2610 発掘区の北東隅にある掘立柱建物で、建物の西南隅を検出した。柱間寸法は桁行・梁行ともに3.27m（11尺）と大きく、桁行は5間か7間と考えられ、後に述べるように、左京四条二坊一坪の中軸線を考慮すると、この建物は桁行7間と推定され、梁行は平城京で検出されている諸例から南北2面庇付の4間と考えられる。柱掘形は一辺1mほどの方形で、柱根が3ヶ所にのこり、径は28cmである。

SA2608 SB2610の南側柱に取り付き、同柱筋の西延長上にのびる掘立柱東西壁で、6間分を検出した。発掘区の西壁に柱穴がかかっているので、この壁はさらに西にのびる。柱掘形は1mほどである。柱間寸法は2.65m（9尺）である。

SB2580 桁行5間・梁行2間の身舎に南北2面庇のつく東西棟建物である。柱掘形は一辺80cmほどの方形で、身舎にあたる柱筋で9ヶ所、庇にあたる柱筋で5ヶ所を検出した。柱穴のうち12ヶ所に柱底跡がのこり、直径は27~30cmである。柱掘形の深さは遺構検出面から身舎40cm、庇10cmほどで庇の柱筋にあたるところは浅い。身舎の西辺部は土壌SK2591などで破壊されていて柱穴はのこっていない。柱間寸法は桁行2.65m（9尺）、梁行2.85m（9.5尺）である。

SB2585 庇がつかない建物と考えられ、桁行5間・梁行2間の南北棟建物である。SB2580の北側柱とこの建物の北妻柱筋は揃っている。西側柱は5間分すべてを検出したが、柱穴の西半分は発掘区外にある。建物の北東部分は土壌SK2615や整地層で破壊されているが、柱穴はかろうじて検出できた。柱掘形は一辺80cmほどで、建物SB2580の柱掘形とはほぼ同じ大きさである。柱掘形の深さは西側が80cmほど、東側が20cmほどで西側が深い。柱間寸法は桁行南2間が2.6m、北3間が2.8mと北3間がやや広く、梁行は2.8mである。

C期の遺構 この時期の遺構は、B期の遺構が廃絶した後に発掘区の南中央で、土壌群SK2591・SK2595・SK2597を掘削して土器片・瓦片を投棄し、埋めて整地している。整地層は二棟の建物SB2580・SB2585の間あたりから南東へと広がり、発掘区外にさらに続いている。この大規模な整地とほぼ同時期に八角形井戸SE2600が発掘区中央に掘削される。

SK2591・SK2595・SK2597・SK2596・SK2615 掘立柱建物SB2580・SB2585の廃絶後に掘削された土壌群である。これらの土壌の埋土には奈良時代中頃の遺物を多く含んでいた。とくにSK

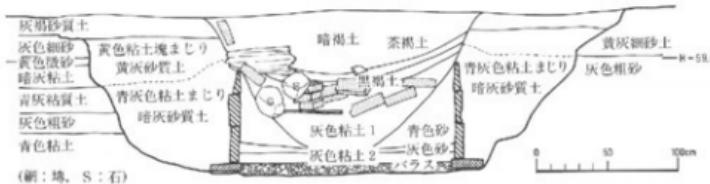


図5 井戸SE2600断面図(左:北、右:南)



写真6 SE2600の上層の状況



写真7 井戸掘り下げ作業



写真8 井戸枠取り上げ作業

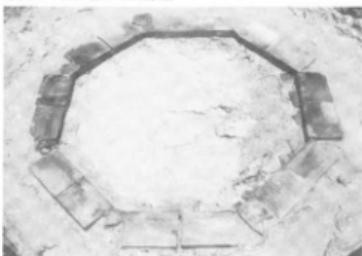


写真9 井戸枠下の構

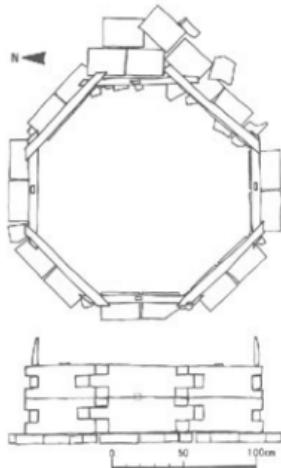


図10 井戸枠実際図  
(多角形井戸の出土例)

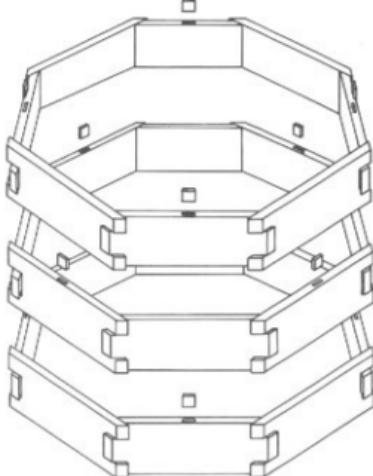


図11 井戸枠組み上げ模式図

六角形井戸・『檍原 奈良縣史跡名勝天然記念物調査報告 第17冊』昭和36 奈良県教育委員会  
多角形井戸・草戸千軒町造跡「草戸千軒町造跡の井戸 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」小部 隆「草戸千軒 No.43、No.49、No.54」  
平城京左京二条七坊三坪「奈良女子大学構内造跡 発掘調査概報Ⅱ」昭和58 奈良女子大学

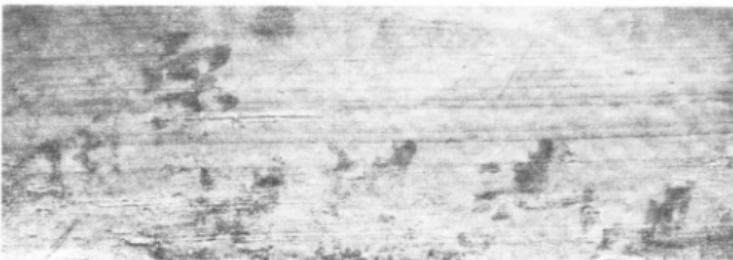


写真12 井戸枠墨書き

2591・SK2597は大量の遺物を含んでいた。遺物についてはⅢ章で述べる。

SE2600（表紙、口絵、写真7～15、挿図5～11）直径1.5m、一辺59.5～64.5cm、深さ1mほどの平面八角形の井戸である。博を八角形に一段並べ、博の上に八角形に木枠を組み上げている。木枠は下三段目まではほぼのこり、四段目が三辺に一部のこっていた。一段目は高さ25.5cmと揃っているが、二段目から高さは不揃いである。板の厚さは6cmほどである。各辺の組み合わせは東西南北の4辺は両端を凸形とし、斜辺は両端を凹形として、凸部を挿入し八角形に組む。上下の木枠は4辺ずつ交互に太枠で固定し、ずれを防いでいる。太枠の位置は一段目と二段目の間では東西南北の四辺、二段目と三段目の間では斜辺に置いている。すなわち、段ごとに互い違いになる。太枠は枠板の上面ほぼ中央にあり、6×6cm、厚さ2.5cmである。井戸底には博が隠れる高さまで小砂利が敷きつめである。博の下には一部に瓦をかませている。博の上端面を水平に揃えるためであろう。

この井戸の掘形は枠板から80～90cm外にある。井戸枠から1.5～1.7m離れて、掘形の外で落ちがある。この落ちは、高低差約10cmで井戸を囲うように1辺約4.5mの方形になっている。井戸の周辺が埋敷きになっていた痕跡と考えられる。

この井戸の掘削時期は、掘形埋土から出土した遺物から天平末年と考えられ、また廃絶の時期は井戸底の埋土の出土遺物や上層の出土遺物から、奈良時代末期には埋められ、平安時代にはあって完全に廃絶したと考えられる。

（呪符・祭祀の参考文献）

水野正好「竹箇をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒No36』 1976

水野正好「三宝堂神社と天中の呪符」『草戸千軒No47』 1977

水野正好「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」『草戸千軒No50』 1978

『古代研究18』「鶴塚・呪符の特集」 1978

黒川保明 資料紹介「井戸における斎事使用の一例—滋賀県高島郡高島町鳴滝跡の井戸—」『古代研究19』 1980

水野正好「鎮井祭の歴史」『奈良大学紀要第十号』 1981

林 博通・栗本政志「近江国府開闢官衙遺跡の調査—大津市瀬山野狐遺跡の調査概要—」『古代文化』 1983.1

井戸掘影の中で、木棒に接して棒片が各辺で発見された。棒片は垂直に近い状況や横になった状況で木棒にへばりつくもの、ややはなれるものなど厳密には状況は一様ではないが、これらの棒片は井戸開鑿時の祭祀に関連したものと考えられる。

なお、井戸枠の東1段目の外側に右記の墨書が「可  
あった。祭祀に係わる字か、呂書であるのかはき  
めがたい。」  
〔宗  
〔地地池池□(人□)〕」  
(脚注)地地池池□(人□)

SD2598・SD2599 八角形井戸から東と北それぞれに1.5mほど離れて南北溝SD2598・東西溝SD2599がある。溝の幅30cm、深さ10cmと小さく浅い。井戸を囲うようにあり、SE2600の排水処理に関連するかもしれない。

SA2588・SA2606 南北堀SA2588はSE2600の南にあり、4間分を検出した。この掘立柱掘の柱掘影は南北に長い長方形である。5つの柱穴のうち4つに柱根がのこっていた。柱間寸法は2.8m(9尺)である。SA2588の北延長上に南北堀SA2606がある。一間分しか検出していないが、柱間は2.8m(9尺)である。南の柱穴には柱根がのこっていた。このふたつの堀は井戸SE2600をはさんで同一線上にあり、同じ堀の南北とも考えられるが、SA2606の柱穴は正方形に近く、SA2588とは異なり同一の堀かどうかは決めがたい。

SA2579・SA2587 掘立柱の南北堀SA2579は発掘区の東南にあり、2間分を検出した。柱掘影は一辺60cmの方形で、柱間寸法は2.8mである。SA2587はSA2579の北延長にある掘立柱の南北堀で4間分を検出した。柱掘影は一辺60cmほどの方形で柱間寸法は2.8mである。この2つの堀は同一線上にあり、柱間寸法も揃い、柱穴が未検出の所でも2.8mの柱間寸法で割り付けることができる、同一の堀かもしれない。

#### その他の奈良時代の遺構

SA2581 発掘区南端中央にある小さい掘立柱穴の南北堀で、2間分を検出した。

SA2584 SB2580の東にある折れ曲った掘立柱の堀である。

SA2612 SB2580の東にある掘立柱の南北堀1間分である。

SA2604 SB2605の東にある掘立柱の南北堀で、4間分を検出した。A期の可能性がある。

SD2614 発掘区南端にある東西溝である。

SD2601 SA2590の北1mほどの発掘区の西寄りにある。溝幅約80cm、深さ10cmほどである。

#### 古墳時代の遺構

SD2593・SD2594 発掘区の西南で検出した斜行する溝である。溝幅は約80cmあり、黒褐色土の埋土でよくしまり、古墳時代の土師器・埴輪片を含む。この溝と同じ埋土の南北溝がSB2580の東北隅付近に重複しており、7世紀代の須恵器が出土している。

#### 奈良時代以降の遺構

SD2602・SD2603 発掘区の西寄りにある南北溝で、SD2602から奈良時代の遺物が出土している。

**土取穴群** 発掘区の北半部の西寄りで円形の穴を多く検出した。粘土を取るための土取穴で、中世以降の穴である。

**近世・近代の井戸・土壙** 発掘区の北端中央部で近世～近代の井戸や性格不明の土壙を検出した。耕土直下の土層から掘削されていて、いずれも新しい。

### 3. 占地と建物配置

検出した遺構を手懸りにしてこの坪の建物配置を考察する。

今回調査した地区は、平城京左京四条二坊一坪の中央西寄りにある。検出した遺構は国土測量法による国土地理院第六座標系で実測しているので、建物群が坪内のどういう位置にあたるかを考察するために、まずこの坪の位置を同じ座標系上で復原してみたい。平城宮周辺や平城京の発掘調査でえられた既知の成果を利用して求める。平城宮跡第39次発掘調査で検出した二条条間路と東一坊大路の中心線の交点を起点として、朱雀大路発掘調査で明らかになった朱雀大路の振れ ( $N 0^\circ 15' 41'' W$ ) を東一坊大路の振れに適用する。1尺 = 0.296mと想定し、一坪の一辺は450尺であるから、左京四条二坊一坪を四隅する道路の中心線の交点の座標値は表2のようになる。この座標値から、坪の中軸線や四分割線を得ることもできる。

SB2610は発掘区では建物の一部を検出したにすぎないが、この建物の柱間寸法は桁行・梁行とも11尺で、平城京の宅地の建物のうち大型の建物に見られる10尺間よりもさらに大きい。これほどの柱間をもつ建物は坪のうちでも中心的な建物であろう。しかも、この建物は坪のほぼ中心



図13 坪と建物配置

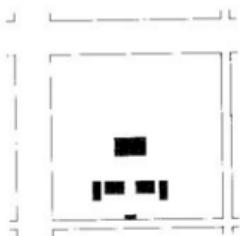


図14 坪中心部の  
推定建物配置

#### 藤原京・雅波京の宅地班給例

藤原京の宅地（特従5年12月）	
右大臣（從二位）	4町
直広元（從四位下）以上	2町
大參（正五位上）以上	1町
勅（正六位上）以下	上戸 1町
・	中戸 2町
・	下戸 3町
義波京の宅地（天平6年9月）	
三位以上	1町以下
五位以上	2町以下
六位以上	3町以下

にあり、坪内の位置や柱間の大きさからSB2610を主屋とみなすことができる。坪の中心にある主屋は南面する東西棟の事例が多く、SB2610も東西棟と考える。東西棟と考え、坪の中軸線・柱間寸法を勘案し、桁行7間と考えると建物の中軸線と坪の中軸線が一致する。また梁行は平城京で検出している主屋と考えられる建物には2面庇の事例が多いので、この建物も南北2面庇付の梁行4間の建物と推定すると、SB2610は桁行7間・梁行4間となり、柱間寸法にふさわしい大型の獨立柱建物となる。SB2610は坪の中心に位置するので、SB2610が存在する期間は、この坪は分割されず宅地は1坪を占めたことになる。

SB2580の東妻は坪の中軸線から15尺隔たり、桁行9尺なので西妻は60尺隔たることになり、この建物を中軸線から計画的に配置していることがわかる。SB2585は北妻柱の柱筋をSB2580の北側柱筋に揃えていて、この2棟は計画的な配置で同時に存在していたと考えられよう。SB2610も坪の中軸線上にあり、SB2610・SB2580・SB2585の3棟は坪の中心区画に計画的に配置しているのであろう。門の位置については推定するほかはない。この坪は左京四条二坊の西北隅で、北は三条大路に、西は東一坊大路に面する位置にある。京内の大路に面する宅地では一般に大路に家門を開くことは禁じられており、この坪の検出遺構を勘案すると、家門は南に聞くと考えるのが妥当である。坪の中軸線に対称に建物を配置していると考え、家門を南とすれば、この坪の建物配置は図14のようになり、SB2610を主屋、SB2580は西前殿、SB2585は西脇殿とでも呼べよう。なお、もしSB2610が南北棟建物であれば、家門を東に聞く建物配置となろう。

宅地が一坪全体を占めることや、建物配置、主屋の規模などから、この坪は身分が相当高い人物の邸宅跡と考えられよう。この邸宅の建物配置はコの字型建物配置の変形である。平城京内でこれまで検出された邸宅の建物配置は、主屋と脇殿を計画的に組み合わせたコの字型の事例が多い。一方、平城京左京五条二坊十四坪で検出した邸宅のように、コの字型建物配置の変形事例もある。平城京の邸宅の建物配置には厳密なコの字型建物配置ばかりではなく、前述の事例や本調査のような変形のコの字型建物配置があったと見ててもよいであろう。

### III 遺 物

#### 1. 土 器

土器は、井戸、溝、土壤、掘立柱穴等の遺構のほか、それらの遺構を覆う整地土層や水田床土等からも出土し、整理箱で約30杯分ある。

奈良時代の土師器・須恵器を主体とし、他に平安時代の土器あるいは古墳時代の土器・埴輪などが少量ある。土器の記述は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠する。

##### 遺構出土の土器

###### SE2600

井戸SE2600の土器は大きく井戸枠内と井戸掘形内の土器に分かれる。

###### 井戸掘形の土器

土師器と須恵器若干が出土している。小片が多く図示出来るものは少ない。

土師器では甕、須恵器では皿B（9）・甕B・盃がある。掘形の土器で特に注目されるのはSK2596出土土器と同一個体に属する須恵器片が含まれていることであって、後に記すように遺構の年代、特に井戸の掘削年代を推定する重要な手掛りとなった。

###### 井戸枠内部の土器

井戸枠内部の土層（図5）は埋没の状況によって大きく4層に分けられる。井戸底面のパラス敷きを最下層として順次下層（灰色粘土2・灰色砂）・中層（灰色粘土1）・上層（暗褐色土・茶褐色土・黒褐色土）とする。中層以上は井戸の機能が失われた時期以降の堆積である。井戸は機能を失ったのちも産みとして残り、完全に埋没したのは上層の時期であった。

最下層：井戸底面のパラス敷きにまじって土師器・須恵器が少量ある。土師器では椀、須恵器では杯B、同蓋等の器形が知られるもののいずれも小片で、図示しうるものは無い。

下 層：土師器では杯A・椀E・甕（12）、須恵器では杯A・杯B・皿B・甕がある。土師器杯Aは(1)、(3)が $b_0$ 手法、(2)が $a_0$ 手法。暗文を持つものはない。(3)はほぼ完形。(2)はI群土器。(1)、(3)はII群土器とみられる。これらの土器は平城宮土器Ⅳに近い。椀E（6）は完形で、砂を含む荒い胎土である（註1）。須恵器杯A（5）は底部外面へラカリの後クロケズリする。火ダスキをもつ。II群土器。杯B（8・10・11）および皿B（9）はI群土器で、底部にはヘラカリ痕と瓜状压痕を有する。甕には全体外面に格子目叩きを残すものがある（13）。

中 層：井戸の廃絶あるいは廃棄とともに形成された層である。

ただしこの段階にはまだ井戸は完全には埋没しておらず渦みになって残っている。土師器皿A（4）がある。放射1段暗文をもつ。素母を含む荒い胎土である。平城宮土器Ⅲに属す。混入品であろう。

上 層：土師器杯A・甕Aと須恵器杯Bがある。土師器杯A（7）は小型薄手の杯で内面及び外面上端を狭くヨコナデ（e 手法）する特徴的なもの。他にこれとはば同一の特徴を持つ個体が

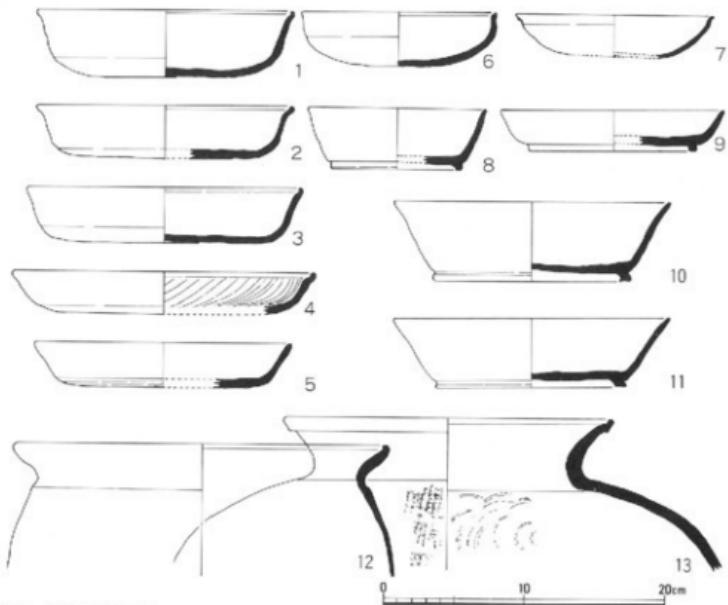


図15 SE2600出土土器

あり、それには口縁部内面に付着した煤が残り、灯火器としての使用がうかがえる。10世紀前半に位置づけられる。

以上の上器はほとんどが断片となっているが、そのなかで、奈良時代の土師器椀E(6)、杯A(1~3)そして平安時代の杯A(7)のごとく、完形または完形に近い土器の存在が注目される。前者は井戸としての使用の下限を、後者は最終的な埋没の時期をそれぞれ示すものである。

#### 土壤出土の土器

SK2591

土師器杯A・皿A・高杯・小壺・甕・須恵器杯B・杯蓋・杯C・皿B・水瓶・壺・壺蓋等があり、それに埴輪がある。土師器は小破片で図示できない。須恵器杯B(18)はI群土器。須恵器杯C(14~16)は土師器杯Aを模倣した形態で、口唇部内面に沈線をめぐらす。いずれもII群土器。(14~16)・(18)は火ダスキーをとどめる。杯蓋には環状つまみをもち、内面に返りをめぐらす特異な形態を持つもの(17)があり、丁寧なハラミガキで器面を平滑に仕上げる。本遺跡の須恵器の大部分を焼成したと考えられる大阪府陶邑古窯址群には例が知られておらず、三重県斎王宮から類例が出土している。水瓶(19)は細頭の金属性水瓶の形態を忠実に写したもので、整地層

からも同様の器形が出土している(60)。これらの土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する。

#### SK2596

須恵器が多く、杯A（38～41）・杯B・杯B蓋（27～36）・皿A・皿B（44・45）・鉢A・高杯・水瓶・壺・壺蓋（42）等の器種がある。口径約60cmの須恵器大甕が出土しており、破片が所々に散在する。SE2600掘形にも同一個体に属する破片がある。須恵器杯蓋の点数が多いのに対して須恵器杯Bが非常に少ない。土師器は杯A・杯B・蓋・壺等の器種があるが細片のため図示できない。(29)はロクロケズリが口縁部下半部までおよぶ。(44)は口縁部内面及び口縁部外下面下半部を丁寧なヘラミガキで平滑にする。須恵器ではⅠ群土器、Ⅱ群土器のいずれにも屬さない畿外の產地かと推定される土器の存在が認められる(27・29・30・33ほか)。杯B・杯B蓋に顕著であり、高杯にもある。手法的には、蓋の場合必ずロクロケズリし、胎土に砂を含み、硬質の焼成で蓋の類はすべて上面に灰をかぶる等の特徴がある。中には自然釉が掛かるものもある(30)。(38)は底部ヘラキリのままで、(39～41)は底部外面ヘラキリのあとロクロケズリする。(40)は口縁部外面に降灰がみられる。須恵器でロクロの回転方向は(34)・(35)が左まわり、ほかはすべて右まわりである。(32)・(36～39)・(42)・(45)はⅠ群土器。(44)はⅡ群土器。これらの土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

#### SK2597

土師器・須恵器が出土した。すべて細片で図示できるものはない。土師器には皿A・桶・壺がある。皿Aには灯火器に用いたものがある。須恵器には杯A・杯B蓋・皿Aのほか蓋または甕の破片がある。以上の土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

#### SK2613

土師器に杯A・杯B・高杯、小型甕(21)、須恵器には片口をもつ甕があり、他に埴輪がある。土師器杯Aは2段放射暗文をもつ。小片で図示できない。土師器皿A（20）は小型品である。杯Bは外傾する低い高台を持つ。高杯は杯部に2段放射暗文をつける。須恵器は杯Bが3個体ある(22～24)。口縁部外外面にはロクロによる凹凸が著しい。外傾きの低い高台を有する。いずれも焼成は窓く軟質で、Ⅰ群土器とみられる。これらの土器は平城宮土器Ⅰに属す。

#### 柱穴出土の土器

柱穴からも土器が出土している。すべて小片で量もすくない。年代的には、漢然と奈良時代とわかるものの、それ以上詳細な年代を決定できる土器は多くない。

#### SA2608

この場の柱穴から土師器・須恵器・埴輪が出土した。器形の判明するものには須恵器の杯B・杯蓋・杯Cがある。須恵器杯蓋(25)は頂部が高く、ロクロケズリする。平城宮土器Ⅱ以降に属す。

#### SB2610

この建物の柱穴から円筒埴輪が出土している。

#### SB2580

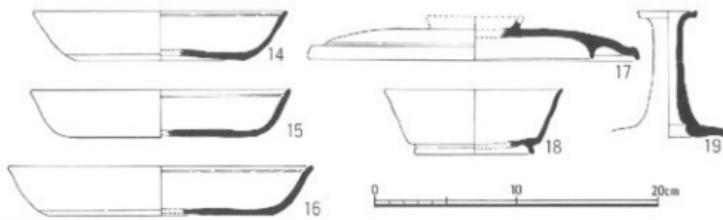


図16 SK2591出土土器

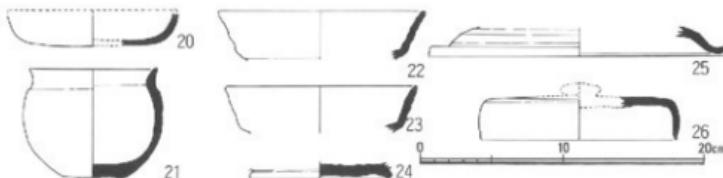


図17 SK2613・SB2585・SA2608出土土器

掘形8ヶ所から土器が出土している。わずかに土師器杯と須恵器蓋に8世紀前半とわかるものがある。

#### SB2585

掘形3ヶ所から土器が出土している。土師器皿A・皿B・甕、須恵器に杯A・壺蓋がある。須恵器壺蓋(26)はII群土器。

#### 溝出土の土器

平城京以前のSD2593・SD2594から円筒埴輪片と布留式の土師器が出土している。SD2580に重複する南北溝から、返りをもつ7世紀後半の須恵器蓋が出土している。

#### 整地土・包含層出土の土器

造構の上面を覆う整地土から大量の土器が出土した。土壌群の上を覆う整地土及びその周辺に広がる包含層には多量の土器が含まれる。大半が奈良時代の土器で、先に記述した土壌等の造構から出土したものと接合するものもあり、本来はそのような造構に属していたものが後に上部の擾乱等によって移動した結果と考えられる。ここではそれらの土器を一括して扱うこととした。

大量の須恵器と少量の土師器がある。土師器は皿Aなど小破片のみで図示しうるものが多い。須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・杯F・杯F蓋・高杯・壺A・壺A蓋・壺E・壺K・甕・水瓶等の器種がある。

金粉付着土器：須恵器杯B蓋の内面に金粉が付着したものがある。金粉は器内面のほぼ全体にみられ、特に器面の隨所にある縫みにはよく遺存している。蛍光X線分析によれば金とともに不

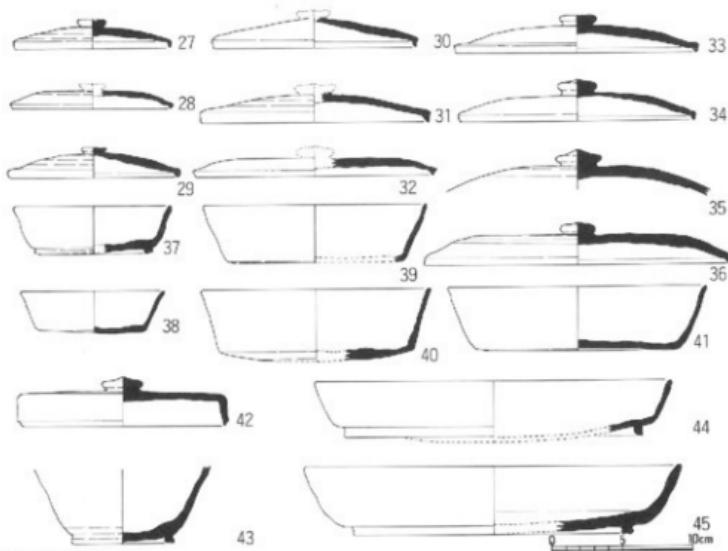


図18 SK2596出土土器

純物として微量の銀が検出されている。おそらく金泥としてもちいたものとかんがえられる。器内面はつるつるに磨滅しており、頂部外面は火ぶくれによってところどころが盛上がっており、窯内での落灰による無数の小穴があいている。その口径は17.2cmである。整地土から出土している。8世紀前半に属すると思われる。

陶硯：整地土から陶硯が2点出土している。いずれも小型の円面硯で圈足部分を残すのみである。このほか須恵器の蓋や杯B高台部分を硯に転用したものが少數みられ、朱墨に用いたものもある。



図19 金粉付着須恵器(1:2)

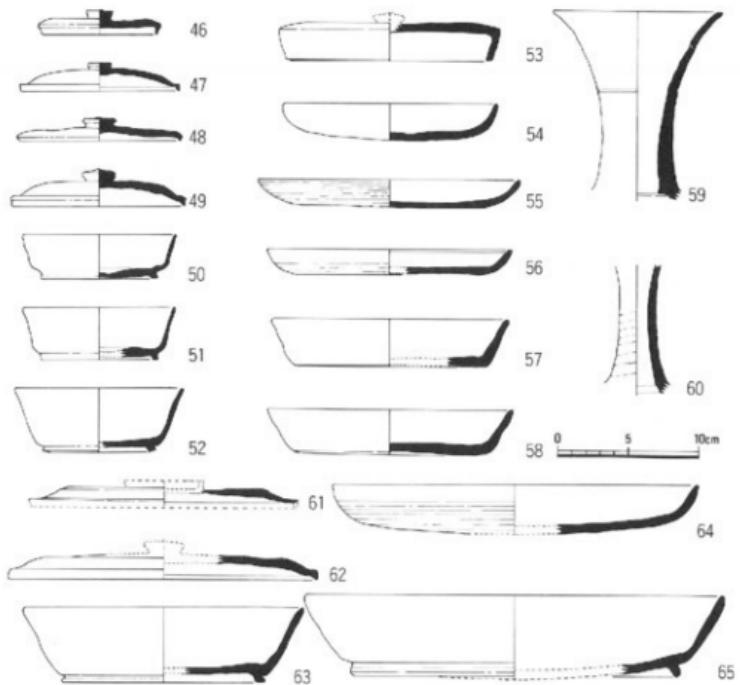


図20 整地層出土土器

### まとめ

本調査区の土器を総体としてみると、平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、すなわち8世紀前半から中頃にかけてのものが主体を占め、この地の最盛期を示している。土器の大部分を出土した土壌群は8世紀中頃に形成されたもので、B期の遺構とともに存在していたものであろう。井戸の開削もそれとほぼ同時を同じくしていると考えられ、大きな時間的隔りはないであろう。土壌群の形成と井戸の掘削は8世紀中頃におけるこの地区的利用状況の大きな変化と密接にかかわると思われる。

本調査区の土器について特徴的な点をあげると、第1に土器の種類では須恵器の量が圧倒的に多く、土師器が非常に少ないと、第2に器種のうえからは杯・皿など食器類が大部分を占める事、第3は水瓶等の金属製仏花器の形態を模倣した土器、あるいは図16～17にかけたような特

殊な形態をもつ土器の存在である。第4にはSK2596の頃でも触れたように畿外で作られたと考えられる土器の存在があげられる。

第1の点はこれまでの京内遺跡の調査でも共通したありかたを示し、土師器の占める比率の高い宮内の土器との相違点としてあげられるところである。第2、第3の特色は本調査区の性格と密接にかかわると思われる。また第4の点に関して從来の京内遺跡の調査でも東海地方など遠隔地の土器の存在が指摘されている。

これらの点を総合すると、本遺跡における土器の様相は、左京一条三坊（註2）や左京四条四坊（註3）等の邸宅に關係する遺跡と共通する点が多い。土器からみても本調査区が高位の人物の住居に関わる遺跡であることは明らかである。これに加えて第3の特色、金粉を用いる作業が本遺跡で行われていた事を物語る金粉付着土器の存在は本遺跡の合わせ持つ特殊な性格の一端を示すのではないだろうか。それが何であったかは特定できないけれども、写經関係の施設をその候補の一つに挙げることができるのではないかと考えられる。

註1 土師器碗Eは今回設定した器種名である。碗Cに似るがそれとは區別される。その特徴を述べると、低平な丸底の底部で、口縁は直立ぎみで、口唇部は凹線をなすものが多い。口縁部外面のヨコナギは幅広い。底部は不調整のままで、ヘラケズリやヘラミガキを加えることはない。碗Eの良好な資料は、奈良市前川遺跡から多量に出土している。京内で一般的な土器と予測している。奈良市『平城京木雀大跡発掘調査報告』1974 Pl. 20-36・37、24-123・124-130など参照。

2 奈良国立文化財研究所『平城京左京一条三坊の調査』平城宮発掘調査報告Ⅶ 1974

3 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983

#### 平城宮土器の大別名称と略年代

大別名稱		略年代
平城宮土器 I		A.D. 710
平城宮土器 II		725
平城宮土器 III		750
平城宮土器 IV		765
平城宮土器 V		780

## 2. 瓦・埠

瓦埠類の出土量は他の京内遺跡に比べるとかなり多い。特に井戸SE2600からは大量の埠とともに瓦類の出土をみた。このほかはほとんどが整地上から出土したものである。

瓦類のうち多数を占めるのは丸瓦と平瓦で、ついで軒平瓦23点、軒丸瓦13点である。

記述にあたって、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を用いる。

軒丸瓦（図21・22、写真17） 軒丸瓦は5型式5種に分類することができる。

6227型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に二重圓線をめぐらす。外区外縁が素文であることを特徴とする。A・B・Dの3種が知られているが、本例は中房が弁区より一段高く、弁が長い弁端が丸いことからD種と判定できる。調整法は、瓦当裏面・頭が横位窓削り、丸瓦凸面が縦位窓削りである。焼成は不良で、外面が黒色を呈す。胎土に3~4mmの比較的大粒な石英を含む。土壤SK2597から1点、整地上から3点出土した。同范例は、平城宮のほか、平城京左京三条一坊十四坪、大和豊浦寺にある。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）であろう。軒平瓦6663Jと組み合う可能性が高い。

6282型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と線鋸齒文をめぐらす。弁の輪郭線を凸線で表現するのが特徴である。A・B・D～I・Lの9種がある。本例は弁の盛り上がりが強く、弁端が間弁に接するので1種にあたる。I種は範の彫り直しがみられ、Ia種とIb種に細分されている。Ta種は各弁が独立して細いのに対し、Ib種は弁がとなりの弁や間弁に接するなど乱れが目立ち、しかも太い。本例はこのうちのIa種に属す。瓦当裏面にナゲ、頭に横位窓削りが施されている。焼成は良好で、青灰色を呈す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮大膳職地域や東院地区で多く出土し、平城宮軒瓦編年第Ⅲ期に編年されている。

6285型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と線鋸齒文をめぐらす。中房が比較的小小さく弁が長いのが特徴である。A・Bの2種に細分されている。本例は内区の盛り上がりが強く、中房が弁区よりわずかに高いのでA種にあたる。瓦当裏面と頭は横位窓削り、丸瓦凸面は縦位窓削りである。焼成は良く、外面が暗灰色を呈す。土壤SK2591から1点出土した。大和歌姫西瓦窯の所産<sup>1</sup>で、平城宮のほか、平城京左京一条三坊十五・十六坪、同二条二坊十四坪、同三条二坊六・十・十五坪、同九条三坊三坪、東三坊大路、山城恭仁宮、大和秋篠寺、唐招提寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老5年～天平17年）に位置づけられている。

6308型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と粗い線鋸齒文をめぐらす。中房が弁区より一段高く、間弁が弁の周囲をめぐらないA系統であることを特徴とする。A～D、H～Nの11種に細分されている。本例は中房の突出度がわずかで、弁端がそり上らないのでA種にあたる。表面の造存状態が悪く、調整法はわからない。焼成は不良、外面が暗灰色を呈す。整地上から1点出土した。同范例は平城宮のほか、平城京左京二条二坊十二坪<sup>2</sup>、東三坊大路、西一坊大路、西隆寺、薬師寺にある。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期に編年できる。

6348型式は複弁7弁蓮華文軒丸瓦で、外区に唐草文と線鋸齒文をめぐらす。A種だけが知られ

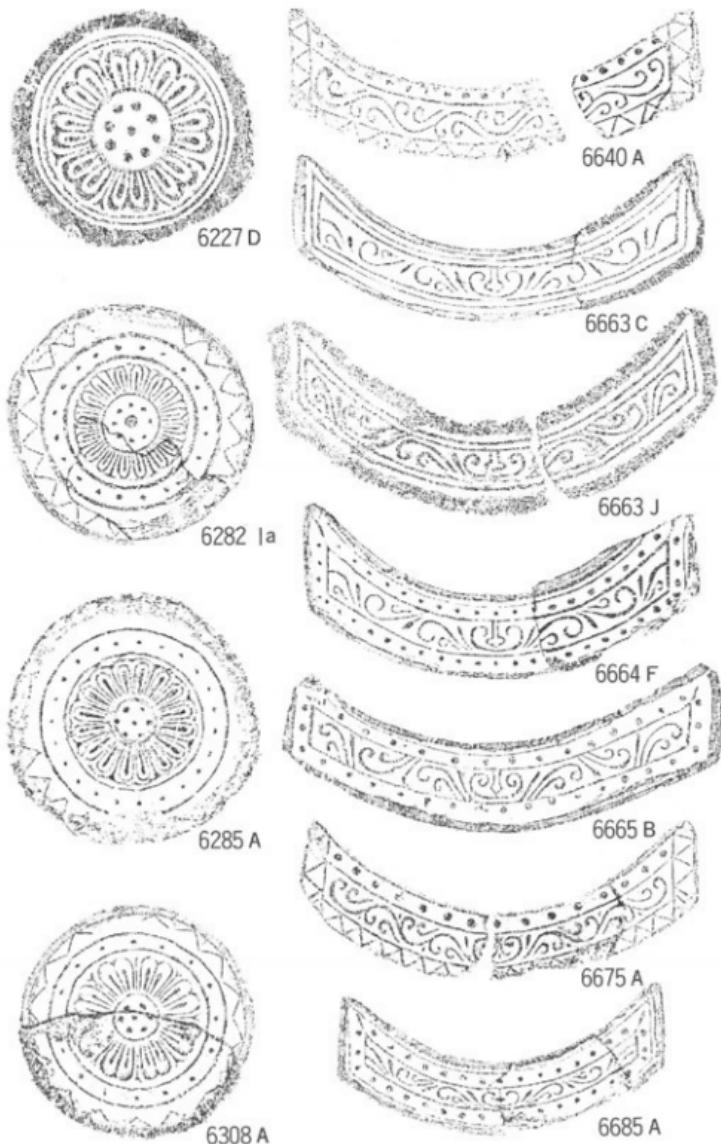


図21 軒丸瓦・軒平瓦(4分の1)

る。整地土から出土した1点は完形で、細かな観察が可能である。比較的大きい中房は高く突出し、蓮子は1+8。弁の盛上りは小さく弁端がややそり上る。間弁はA系統。外区内縁の唐草文は18単位で、反時計回りにめぐる。外縁の線鋸歯文は粗く、19単位ある。瓦当裏面は平坦で、全面にナデを施し、縁辺部に横位窓削りを加える。額は部分的に横位窓削り。窓削りを施さない部分には笠型痕が残り、幅約2mmの凸線状隆起がみられる。丸瓦凸面は縦位窓叩きを施してから、丸瓦部に縦位窓削り、玉縁部凸面と端面に横位ナデを追加する。なお玉縁部にも縦位窓叩きの痕跡をとどめる。凹面は瓦当ちかくに横位ナデを施すほかは、全面に布目を残す。側面は瓦当から玉縁部にむけて縦位窓削り、さらに凹面側に面取りを加える。焼成は良好で、淡灰色を呈す。胎土が特に精良である。全長380mm。ほかに満SD2583から2点、整地土から2点出土した。平城宮における出土数はきわめてわずかなのに対し、平城京城で多数出土している。左京一条三坊十五・十六坪、同三条一坊十五坪、同三条二坊六坪、同四条二坊三坪、同五条三坊十三坪、同八条三坊十・十五坪、東三坊大路、右京六条四坊七・十坪、西一坊坊間大路、法華寺、薬師寺、法隆寺東院に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期に位置づけられているが、内区文様が藤原宮式軒丸瓦6279型式に類似するので、平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）にさかのぼる可能性もある。当調査区の軒瓦出土比率から、軒平瓦6675Aと組み合う。この軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせは、従来あまり明確でなかった平城宮内の邸宅などで使用された軒瓦の組み合わせの一つと考えられる。

軒平瓦（図21、写真17） 軒平瓦は6型式7種に分類することができる。

6640型式は内区右半に5単位の左偏行唐草文、右半に4単位の右偏行唐草文をあしらった変則的な偏行唐草文軒平瓦で、上外区に珠文、下外区・臨区に線鋸歯文をそなえる。A種のみが知られる。額は段頭で斜位窓削り、平瓦凹面には模骨痕・布目を残し、瓦当ちかくを横位窓削り。側面は縦位窓削りで凹面側に面取りを残す。焼成は良好で、灰白色を呈す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮のほか、平城京左京二条二坊十三坪、同五条一坊七坪、東三坊大路に同范

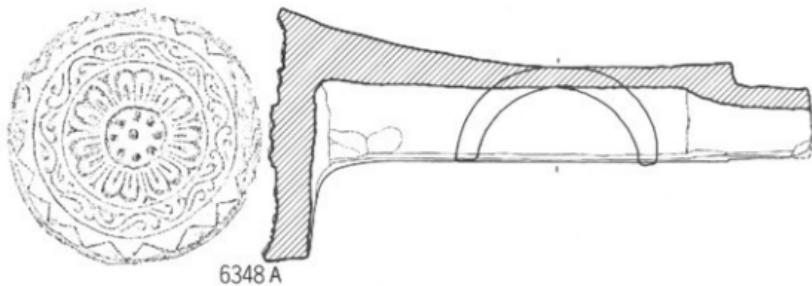


図22 軒丸瓦実測図(4分の1)

例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅰ期であろう。

6663型式は花頭形中心飾をそなえた3回反転均整唐草文軒平瓦で、外区に二重圓線をめぐらす。A～F、H～Mの12種に細分されており、そのうちC種とJ種が出土した。

6663C型式は唐草基部が界線に接しないこと、左半の第2単位第1支葉の巻き込み方が逆なこと、第3単位の主葉先端が脇区に接すること、右半の第3単位第1支葉を欠くことを特徴とする。頸は段頸。遺存状態が悪いため、調整法はわからない。焼成は不良で、淡黄色を呈す。整地土から1点出土した。平城宮第二次朝堂院地区で多く出土するほか、平城京左京二条二坊十二・十三坪、同三条二坊九坪、同五条二坊十四坪、同八条三坊十・十五坪、東三坊大路、秋篠寺、唐招提寺、法隆寺に同範例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期。

6663J型式は唐草が線太で、唐草基部が界線に接し、第3単位主葉・第1支葉が巻き込んで脇区に接しない。曲線頸で、平瓦凸面は縦位縄叩き後、瓦当ちかくを横位ナデ、凹面は瓦当ちかくを横位窪削り。側面は縦位窪削りを施してから、凹面側に面取りを加える。焼成は不良で、淡灰色ないし淡黄色を呈す。胎土に3～4mmの比較的大粒な石英を含む。井戸SE2600の埋土から1点、整地土から4点出土した。平城京左京二条五坊九・十六坪、同三条二坊六坪、薬師寺に同範例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期。

6664型式は花頭形中心飾をもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周間に珠文帯をめぐらす。A～D、F～Pの15種に細分されている。本例は唐草が線太であることと、唐草文と珠文の位置関係からF種と判定できる。頸は段頸で、平瓦凸面にかけて横位ナデ、凹面ちかくは横位窪削り。側面に縦位ハケメを施す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮内裏地区、内裏東外部地区で多く出土する。平城京左京二条二坊十二・十四坪、同三条二坊七・十・十五坪、同八条三坊十・十五坪、右京二条二坊十六坪、九条大路、法華寺に同範例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期である。

6665型式は花頭形中心飾をもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周間に珠文帯をめぐらす。左右の第3単位主葉先端が脇区に接しないのが特徴である。A・Bの2種に細分され、本例は花頭基部と唐草基部が界線に接するのでB種にあたる。頸は段頸で、縦位窪削り。平瓦凸面の頸ちかくと凹面の瓦当ちかくはともに横位窪削り。なお凹面で窪削りが及ばない部分に、模骨痕と布目が残る。側面は縦位窪削り。焼成は良好で、青灰色を呈す。整地上から1点出土した。平城宮のほかに、薬師寺に同範例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期であろう。

6675型は八字状の中央に珠文をそなえた形状の中心飾をもつ4回反転均整唐草文軒平瓦で、上外区に珠文、下外区・脇区に縦筋唐文を配す。唐草は連続し、第2～第4単位の第3支葉が小粒である。A種のみが知られる。頸は段頸で、縦位窪削りを施す。平瓦凸面は縦位縄叩きのち、頸ちかくを横位あるいは縦位に窪削りを加え、さらに横位ナデを追加する。凹面は瓦当ちかくを横位窪削りする。窪削りが及ばない部分には模骨痕・布目が残る。側面は縦位窪削り、凹面側に面取りを加える。焼成は良好で、淡灰色あるいは青灰色を呈す。胎土が特に精良である。掘立柱

建物SB2582の柱穴から1点、井戸SE2600の埋土から1点、溝SD2602から1点、整地土から8点が出上した。平城宮での出土数はわずかで、平城京左京一条三坊十五・十六坪、同三条二坊六坪、東三坊大路、北辺坊に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅰ期に位置づけられている。

6685型式は内区と上外区との界線から垂下した凸線の左右に珠文をそなえた形状の中心筋をもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周間に珠文帯をめぐらす。小型で、第3単位主葉・第1支葉が輪区界線にとりつくことを特徴とする。A～Eの5種に細分されている。本例は珠文が大粒なので、A種にあたる。遺存状態が悪いので、調整法はわからない。焼成は不良で、淡灰色を呈す。井戸SE2600の掘形から1点、整地上から2点が出上した。歌姫西瓦窯産で、平城宮内裏地区で多く出土する。このほか、平城京の左京三条二坊七坪、朱雀大路、北辺坊、西隆寺、唐招提寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期に編年されている。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁式である。凸面で叩きを觀察できた資料は、すべて縦位撻叩きであった。このあとに、横位ナデを加える。玉縁部凹面の調整には横位ナデのほか、横位ハケメがある。凸線を1条そなえた例もある。側面は凹面側から分割裁断を入れ、凸面側に破面を残したものが多い。端面には箒削りを施し、さらに横位ナデを追加した例もある。

平瓦の凸面はすべて撻叩きで、縦位のほかに横位の例もある。凹面には布目が残り、横骨痕をとどめた例ととどめない例の両方がある。後者の多くは布端が側面ちかくにあるので1枚作りによって製作されたとみられる。側面には丁寧な縦位箒削りを施したものと凹面側に面取りを追加したものがある。端面は横位箒削りで終了したものと、さらに横位ナデを加えたものがある。資料はすべて細片のため、これらの違いについて相互の関係はわからない。

埠 長方形埠にかぎられている。完形品48点のほかに、破片が多数出土した。破片になった埠の隅部をすべて数えると134点あり、完形品に復原すれば最少34点になる。すなわち、当調査区では最も少なく見積っても82点という多量の埠を出土したことになる。長さ、幅、厚さのいずれも計測できる50点について大きさで分類すると、大型(31.6×14.6×7.2cm)が1点、中型(27.5×20.0×6.3cm)が46点、小型(21.5×15.0×6.0cm)が3点であり、中型が92%を占める。調整法はいずれも、上・下面がハケメ、側面・小口面がナデで、違いはみられない。井戸SE2600から集中して出土し、井戸枠の下に完形品22点と破片8点を數きならべていたほか、井戸掘形や埋土からも多数出土した。埠SA2606・SA2608、土壤SK2595・SK2596および整地土から出土した。

注1 奈良市教育委員会「奈良山」・平城ニユ・タクン予定地内遺跡調査概報 1973年

2 奈良市教育委員会が発掘調査した。中井公氏に御教示いただいた。

3 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査報告書 一昭和57年度」1983年

### 3. 木製品・金属製品

木製品は、井戸SE2600の内部と掘形の両方から出土したが、その数は少ない。

井戸内出土の木製品 いわゆる方形曲物の蓋板と、有頭棒がある。方形曲物の蓋板(2)は、隅丸方形の隅角の破片である。板目にとったヒノキ薄板の両面を削って調整し、片面の縁辺部を大きく面取りする。現存する材のほぼ中央の縁辺には二孔の小孔がある。側板を棒留めした縫じ穴であろう。現存部は長辺が17cm、短辺が9.3cm、厚さが0.5cmである。

有頭棒(2)は、スギの角棒を丸棒状に削り、一方の端部を内から端部に向けて削りこみ、頭部を作る。端部の木口には折りあとを残す。他端部は折損している。現存長30cm、最大径3cmである。この他、井戸内からは檜皮が若干出土した。

井戸掘形出土の木製品 井戸枠外側で、細棒15本が枠板に接するように出土した。これらは上下二段各八面の井戸枠のうち一箇所を除き、すべて枠板外側の各辺中央付近にあった。出土状況からみて、当初は枠板の各辺中央に挿し立てたのである。細棒は井戸枠の上段と下段で形や大きさに違いがある。下段からは8本(1・3~5)が出土した。このうち4本が接合し、1本が木理の状況からこれらと同一材と判断できる。不足があるが、これらはヒノキの板材の上端を主頭状に、下端を水平に切り落し、主頭の両側辺の各一箇所に切り込みを加えた「串」の一端である。大きさは、長さが18.4cm、幅が6.5cm、厚さが1.9cmに復原できる。残る二本は別材をもってあてている。上段からは7本(6~11)が出土した。ヒノキの柱目材を小割りにしたもので、接合したのは3本(10~11)だが、他も木理の状況などから同一材と判断できる。これは、幅2.6cmの細長い材を18~21cm程度に折ったもので、長軸に直交する2条の切り目を入れて折っている。一部はさらに木口を割り裂いている。これらは井戸枠外側の各辺中央部に挿し立ててあったこと、下段に用いられた材が、頭部を主頭状に削り、両側辺に切り込みを加えた一種の串を小割りにしたものであることから、祭祀的な意味をもつ遺物と考える。恐らく井戸枠設置にあたり、湧水と井戸枠の永遠であることを願う祭祀を行い、その折に用いた「串」を祭祀終了後に小割りにし、枠木外側の各辺に挿し立てたのである。奈良時代の井戸祭祀としては、井戸内部から出土した畜串などによって論及されているが、今回のような井戸設置時の例はない。類例の増加が望まれる。

金属製品 佐波理の柄(図24)が出土している。高台の付かない無台柄の口縁部破片で、復原口径は16.5cm、口縁端部内側をカマボコ形に肥厚させ、口唇部は平らに作る。口縁外面には2条一対の沈線をめぐらす。

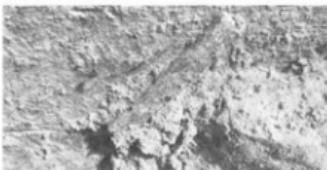


写真23 細棒出土の状況



図24 佐波理柄実測図

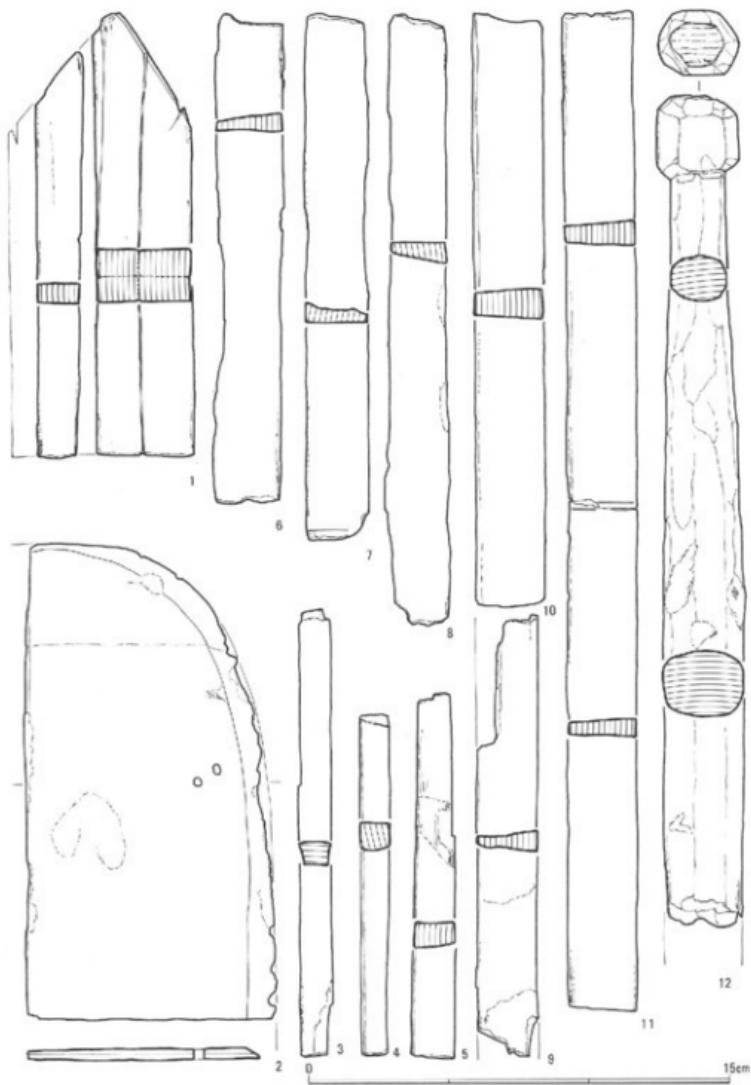


図25 木製品実測図

## IV む す び

今回調査した平城京左京四条二坊一坪の周辺には、特別史跡平城京左京三条二坊古跡庭園や田村第推定地があり、平城宮にも近い。この坪に相当身分の高い人物が居住していたことは充分考えられる。

奈良時代中頃と考えられるB期は、この坪は掘立柱建物SB2610を中心とした計画的で整った建物配置を持つ邸宅で、宅地は1坪を占めていることが明らかになった。ここが誰の邸宅であったかは決めがたいが、市原王はその可能性のある人物の一人である。市原王は天智天皇の曾孫の子で万葉の歌人として名が知られ、また東大寺の造営に係わり、天平宝字7年(763)には造東大寺司長官を務めた人物である。天平宝字2年の『伊賀國阿伴郡佐植郷慈田光賀券』によれば、市原王は平城京左京四条二坊の戸主である。左京四条二坊の東半分は藤原仲麻呂の田村第と推定されているので、本調査地を含む一坪ののこり西半分の8坪の1つが市原王にあてられよう。平城京での宅地判給と官位との関係は不明だが、藤原京や難波京の場合を参考にすると、天平宝字2年の時点では市原王は正五位下であり、この官位で1坪の宅地を占めることができたのかどうか微妙であるが、皇族の一員であることを配慮すれば1坪を占めていてもよいであろう。出土した土器や軒瓦の編年からB期は奈良時代中頃にあてられ、天平宝字2年前後としても矛盾はない。

八角形井戸を発見し、井戸の造構例に貴重な一例を加え、さらにこの井戸を設ける際の祭祀の様相を知りえたのも今回の発掘調査の成果である。この井戸には大量の埠が投げ込まれていて、井戸周囲が埠敷であったと思われる。また整地層からも埠の出土が多く、これほど多くの埠が出土するのは平城京の調査地としてはめずらしい。本調査地では埠を使用する建物を検出していないので、本調査地の周辺の未発掘地に埠を使用する建物か構築物の存在が予想できる。その痕跡を現状では発見できないけれども、奈良時代中頃以前に、この坪が周辺に埠を使用するほどの建物、身分の高い人物の邸宅などがあり、その廃絶後に井戸枠の上台や周囲の埠敷きに用いたのであろう。

この坪は、奈良時代の初めは四分または八分した宅地として、奈良時代の中頃は一坪を占める宅地として利用されていた。奈良時代後半に入ると、整地を行ない八角形井戸を設けているので宅地としての利用は続いた。坪を分割する造構を検出していないので、一坪の宅地が受け継がれたのかもしれない。しかし奈良時代後半の時期の建物は検出していないので、発掘区は宅地の中心部からはずれているのであろう。あるいは奈良時代中頃のような邸宅を構えていなかったのかもしれない。奈良時代を通じて宅地として利用したこの坪は奈良時代中頃が最盛期であった。

（参考文献） 田村第について：岸 俊男「藤原仲麻呂の田村第」『日本古代政治史研究』1966

岸 俊男『藤原仲麻呂』1969

市原王について：日崎范庸「万葉集一市原王を例として」『古代の日本9 研究資料』1951

岸 俊男「藤原仲麻呂の田村第」前掲

写真 遺 構



1 発掘区全景（南から）



2 発掘区全景（北から）

写真 遺構

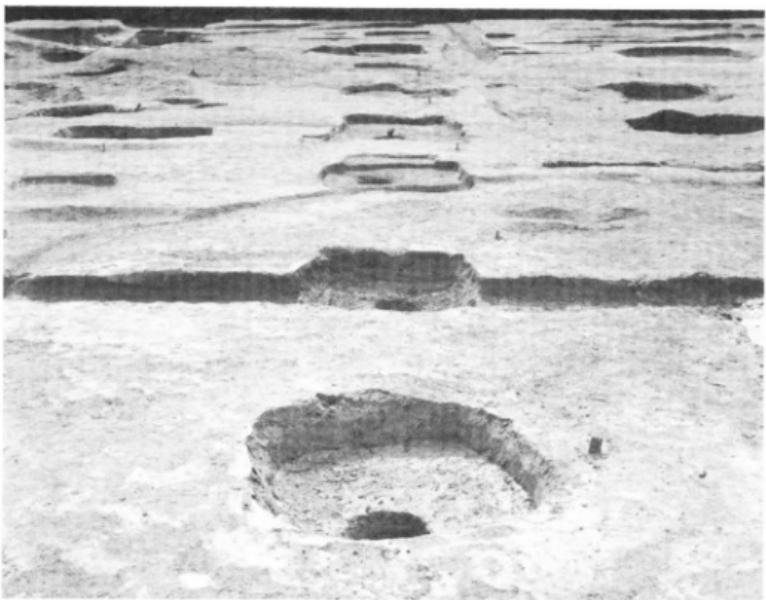


3 SB2580 (南から)

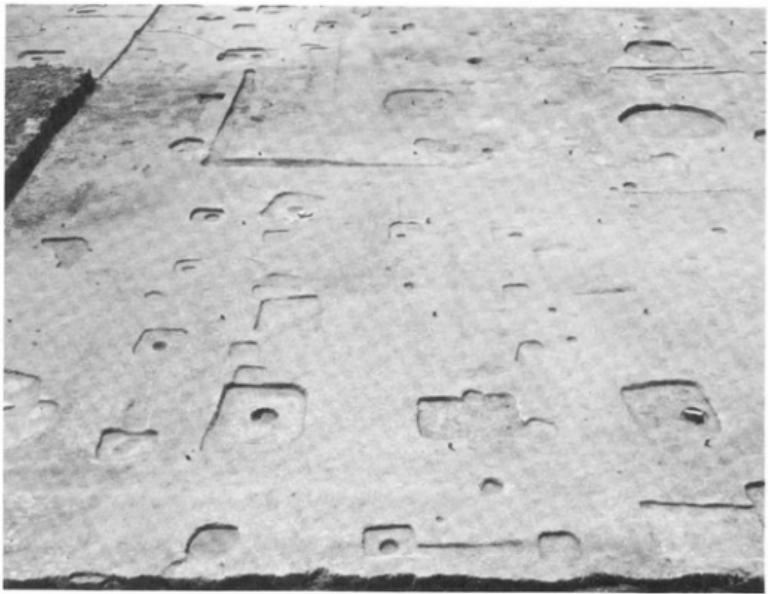


4 SB2585 (南から)

写真 造 構



5 SA2590 (東から)

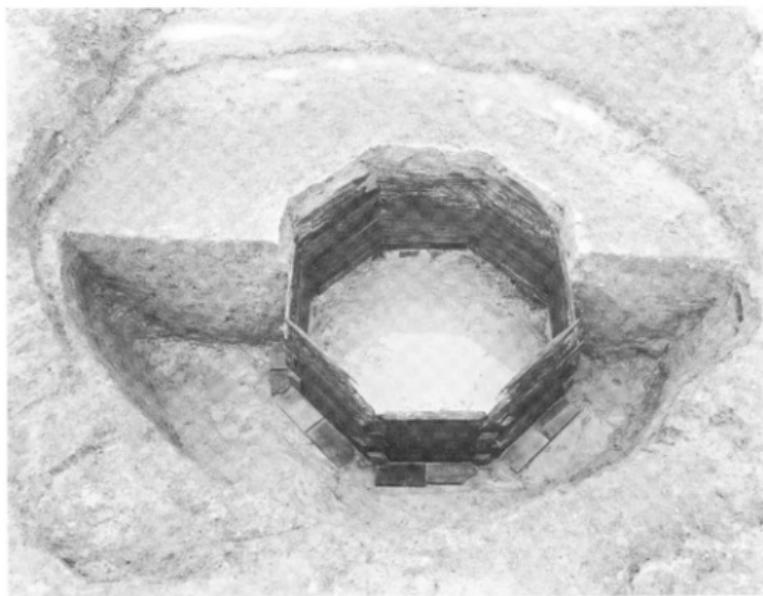


6 SB2605 (北から)

写真 井戸SE2600



7 井戸周辺（北から）



8 井戸と攝影（西から）

写真 井戸SE2600



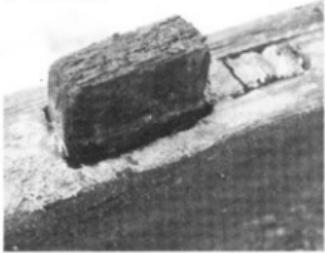
9 井戸枠



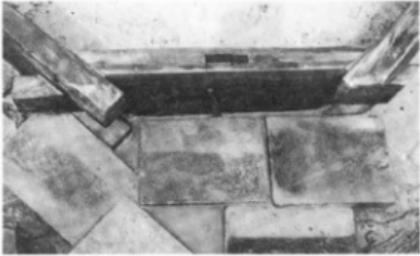
10 井戸枠細部



11 井戸枠組手

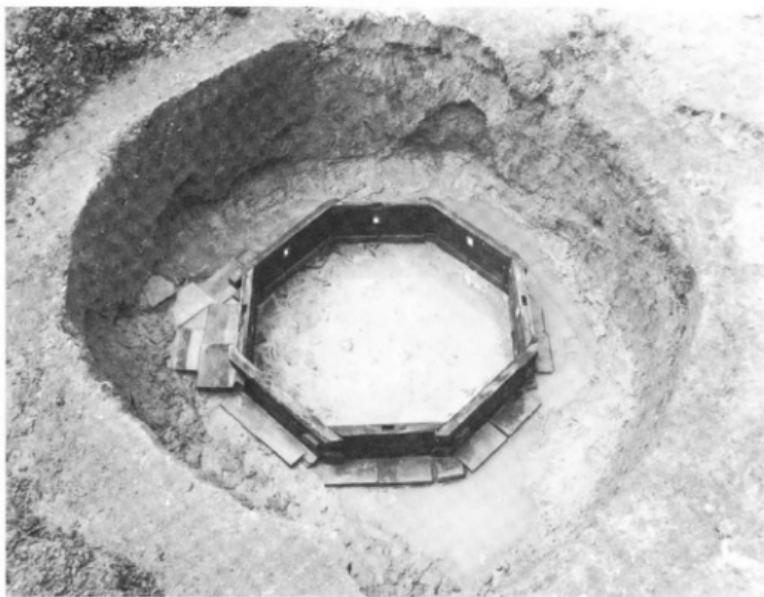


12 太枠

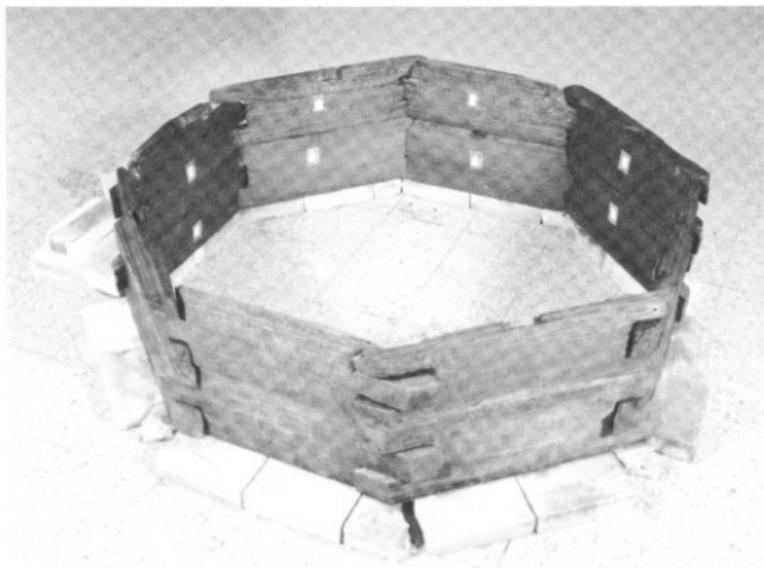


13 井戸枠と堀(細棒付着の状況も見える)

写真 井戸SE2600



14 井戸枠と堀全景



15 井戸枠と堀

写真 遺 物



16 土 器



6227 D



6348 A



6663 J



6665 B



6675 A



6640 A

平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告

昭和59年3月25日 印刷  
昭和59年3月31日 発行

編集 奈良国立文化財研究所  
奈良市三条町2丁目9番1号

発行 奈良県教育委員会  
奈良市登大路町

印刷 共同精版印刷株式会社  
奈良市三条大路2丁目2番6号

